

肥後偉人伝（エピローグ）その生き様に学ぶ

はじめに

パレアのその講座の「熊本の人物」というのが、シリーズであって、第1回目に僕が話をして、途中で五高の記念館で1回しゃべって、それからもう1回しゃべったんですけど、それと同じことなんです。最後にまとめという話なので。まとめになるかどうかは分かりません。たまたま土曜日にね、蘇峰のシンポジウムをやって、あそこでも少し触れたようなこともかかわるので。少し今日の。あのときのレジユメも一緒にお渡しをしました。早速、話を。ということで。

1. 熊本の思想・運動の特徴

熊本の人物といっても近代なわけで。つまり、近世の終わりから近代、今につながる熊本の人物というか、あるいは人物の思想というか、あるいは思想的傾向というかね、そういうものの特質を少し考えてみたいというのが目的ですね。皆さんのお手元にこの系譜がありますね。これも割合長いことかかって昔作ったものなんですけれども。幕末期から明治期、大正、昭和という具合に。どういう具合が、組織が生まれてるかという。これもですね、もっと何ていうか。むげなところがあって、行ったり来たり行ったり来たり、というようなところがあるんです。これをきちんと厳密に凝るというわけにはいかないところがあるんですが。しかしまあ、こういう具合に整理できるんですね。幕末に、ここにあるように「学校党」という党派と、「実学党」という党派と、「勤王党」という党派が三党鼎立しています。しかしこれはですね、この党という。「党」と言ってもいいか、「派」で言ってもいいか。あるいは「連」という言葉で言ってもいいか。ここらへんはもう少し、いろいろと見方によっては、呼び方の可能性があるんですね。というのはですね、どれも、これ、自分たちで名乗ってる名前じゃないんです。全部、あだ名なんですね。まずはですね、「宝暦の改革」というですね、細川重堅のときに「時習館」という学校が造られる。日本で言ったら東大と一緒にです。そういうもともとの時習館という藩校ができて。これ、非常にオープンな学校でね。例えば学校新地というの、玉名の方に造って、そこに干拓やるのね。干拓で上がってきたものすべて学校経営に回す。だから学校に行く人はお金がいらぬ。その学校へ行く資格はね、私塾、私の塾から推薦された者が行くんです。だから武士とは限らない。おおむね、武士が多いんですけど、しかし、ほかの人も行けるといって、そういう極めて開放的な学校として生まれたんです。生まれたただけでも、それなりの人間を輩出し続けてくると、だんだんやることが組子額的なね、権威主義的なものになってくるわけね。そういうもので、そういう学風に対して横井小楠が批判をした。批判をすると、批判をされた方が固まるわけですね。だから、固まって、何くそ！って、批判しやがって！というね、こういうようにして批判されるものが固まって、そして、ますます時習館という学校にしがみつくようになる。これが「学校党」と普通呼ばれてるんですね。だからこれも。だから、ほかの者が付けたあだ名なんですね。それに対して実学。つまり、批判をする横井小楠たちは、つまり、今、学校でやってる学問っていうのが現実に対応していないと。現実がどういう具合に世の中が変わってるのか、その現実に対応するような学問をちゃんとしなきゃ駄目だろうと、という。それを彼らは「実学」と呼んだんですね。これは実用に役立つ学問という言葉とはちょっと違うんですが、やっぱり現実に対して、何らかの能動的な役割を果たすような学問でないといけぬという批判を小楠たちはした。彼らは実学しなさいという。「実学連」だとか「実学派」だとか「実学党」だとかっていう呼び名を与えられる。つまり、こういう対立関係がある。それともう1つは、時勢が幕末にどんどん近づいていきます

と。つまり、外国の勢力が近づいてくる。攘夷運動が出てくる。とりわけペリーがやってきてからというのは、攘夷派というのが全国で闊歩しますね。この肥後藩もあちこちに警備に行きます。最初に行くのは「本牧警備」って言って、言わば、ペリーがやってきたところですね、あそこの浦賀の中のある部分を受け持つんです。そのあと「継嗣警備」って言って京都の警備を受け持つ。そうすると藩士は、それに連れて熊本から出て行くんですね。出て行った先々で、いろんなところの藩の連中と出会うわけです。特に京都はね、もうやっぱり、いろんなところから出てくる。当時「水戸学」っていうのが1つの大きな力を持ってきてます。そういう水戸学の影響を受けた者も京都に行く。学問では今までの「朱子学」に替わって「陽明学」っていうのが力を持ってき始めてる。陽明学をやっている人たちがいる。梁川星巖とかね、いろんなそういう、有名な名だたる人たちが出てくる。そういうものに接する。接する中で、勤王、勤王党とか、そういう党派も生まれてくる。これが帰ってきて「肥後勤王党」になります。これが最もみんなよく知ってるのは、宮部鼎蔵という男ですよ。宮部鼎蔵。弟が春蔵と言って。今、「鼎春園」という公園になってますけど。宮部鼎蔵と春蔵の「鼎」と「春」でね。何もない公園ですけどね。何もないんだけどね、名前だけ付いてるんですけど。七滝の方かな。うん。あっちにありますよ。だからね、そういうような人物が出てくる。そこから田中信道、のぶみちとかね。出てくるんですね。ただし、こっちの方はですね、もう1人、林桜園というすごい男が、影響力を持つ人間がいた。これが千葉城の、NHKの今、下のところに原道館という。原道館の碑ってあるでしょ？ うん。坪井川とNHKとのちょうど境目のところで、もう時期になると、ツツジがわーっと咲くところですね。うん。あそこに塾があったの。そこで学んだ人たちが、また1つの勢力になるのね。これはね、神がかりというか、神の神託でもって行動を考えるという人たちがたくさんいるわけね。この人たちがあとで神風連という。「神風」、「連」でしょ？ 「連」、「連」という字。「連」というのはね、武士の地域組織。もともと。例えば「坪井連」とか、それから「京町連」だとか、という、武士たちの地域組織として「連」ってやつがあるんですよ。これはね、あちこちにこんなのがあってね。地域の組織で縦の、縦割りです。だから、年の上の者から若い者までが1つの、やっぱり地域のね、そういう青年団組織に近いんですけど、そんなもの持ってるんですよ。そういう中でお互いのつながりがあって、一緒に行動するようになる。だから、ただ単に思想、心情で合うだけでなく、そういう地域組織っていうやつが絡んでくるんですね。だから、人の出入りがいろいろとあるわけです。あっちにも組してるようでもあるし、こっちで組してるようでもあるとかっていう、そういうもの出てくるわけですけどね。ともかくまあ、そういう勤王党がいるわけ。

2. 対抗関係と思想・信仰、そして運動

この三派鼎立、対立するんだっていうことですね。ただし、今から見るとね、そういう党派の対立ともう1つは血縁とかね。熊本はね、やっぱり血縁の関係って強いんです。うん。さっきの連というのと血縁と、というね。そういうもので、やっぱりいろいろと錯綜してるんですわ。錯綜してて。僕なんか割合長いこと。例えば実学派の横井小楠に組した人たちっていうのは、藩からもう排除されていたっていう具合に思っていて。大体そういう、思ってる人たち多いんですけど、よくよく見るとね、そんなに排除されてるわけじゃなくて、もう、いろんな形で藩政にかかわりながら動いてるのね。その藩政にかかわって動いてて、そこで手に入れた知識を横井小楠んところに伝える。横井小楠は、もらった知識でもってどうすべきか？なんてことを主張するということですね。やっぱり、これは優れた人物ですから、与えられた新しい知識っていうのをフル動員してね、いろんな検索を行うという、そういうことなんだけど、ともかくまあ、熊本の特徴はですね、1つ批判されると、ぐわっ！とそれに対して、固まって、そ

れに抵抗する。そういう形でもって、言わば何ていうか、党派が生まれてくる。相思が相対立するというですね、そういう傾向が強いです。で、これ、それで。だから、丸っきり相対立する思想がその中から生まれてくるという傾向もやっぱり非常に面白いです。だから、僕なんかは熊本に来て面白いなあと思う1つはですね、そういう意味ではどの思想もね、ものすごいドラスティックなんです。非常に先鋭です。だから、例えば横井小楠という人物だけでいうと、これはもうともかく、肥後藩は嫌いに嫌いです。うん。ですから、嫌いだから、彼は。彼の思想そのものをあちこちに影響与えてるんだけど、藩からは疎んじられる。だからこれに、その力を認めて、藩政にかかわってほしいと思うのが越前藩として出てきておりますね。だから、それもですね、出て行くのも本当は嫌がったんですわ。出て行かすのも。藩にとって小楠が出て行ってですね、よそで何やかんややったら、熊本にとってはあまり好都合じゃないと思うわけね。というんで、それも絶するんですけど、越前藩にはまず行くんですね。何でか？って言ったら、越前藩の松平春嶽の奥さんは、この肥後藩から出てる勇姫なんですね。これ、もう、早いときから婚約してしまいますからね。で、7歳で疱瘡にかかるんですわ。勇姫は。顔にあばたができたって。疱瘡にかかるとたいてい死ぬんですけど、やっぱりねんごろな介護のせいで生き延びてね。しかし、あばたができたんで婚約解消してくれって言うんだけど、春嶽は、いやいや、そんなことぐらいで解消することではないと言って、結局、彼女を娶るんですね。そういうことで春嶽の奥さんとして、ここの最後の殿さんの妹がいますから。だからそういう、あんまりむげに断れないっていうんで、小楠は福井に行くんですね。ええ。ちなみに福井から僕が来てるんですけど。いやいや、全然関係ないんですけどね。で、そんなんで、ともかく新政府にね、横井小楠が入るときもそうです。これはまあ、新政府に王政復古のクーデターの直後1週間後に、もう横井小楠を新政府に迎えることをですね、新政府、決めます。1週間後です。直ちにこちらに連絡するんだけど、肥後藩はそれこそ福井にあるよりはもっと抵抗します。そりゃ、新政府に横井小楠行ったときに、新政府の政策によって肥後藩がどうなるか分からない。そういう不安がものすごいあるわけね。しかし、これはついに断れないです。新政府に行くっていうね。これも、もうそういう非常に関係をよく示している出来事ではあるんですけどね。ともかく、そういうまあラディカルな対立関係っていうやつがあって、熊本の中では、それぞれが、それぞれのけんかのしかたをしていきます。つまり、面白いのはね、勤王党なんです。勤王、普通、例えば自由民権運動っていうのは、どこから生まれてくるかっていうとね、ルソーの民権思想だとかっていうものを知るわけですね。熊本の場合でも宮崎八郎という自分がいて、これが評論新聞っていう新聞にかかわってるときに、ルソーの「民約論」というね、あの当時は「民約訳解」というふうに訳しましたが、つまり、近代の社会ではね、国家と社会っていうやつがお互いに契約を結ぶんだと。社会は国家に対して納税をする。納税をする代わりに、国家は社会に対してそれを保護するという義務を負うという。この社会と国家の間の契約の関係ってやつが、つまり、近代の社会の、近代の国家と社会のシステムだというね、基本だというわけ。これを手に入れるんです。宮崎八郎もそうなのね。ところが彼のもともとの出自はね、何かって言うと、これは党派から言えば勤王党なんですね。しかし、勤王党なんだけど、勉強したルーツでいうとね、ここにね、月田塾ってあるでしょ？ 月田蒙斎って言って、これ荒尾の、荒尾の実学派の人なんですね。小楠の弟子ではないんですけど、かかわりがあるんです。月田蒙斎と。ここで勉強してるんです。しかし、親父は勤王党なんです。政賢っていうのはね、これはもう勤王党だし、勤王党だっていうだけでなく、もう、武術の達人ですよ。これは熊本に珍しいですね。幕末に江戸まで行って。江戸で、要するに剣術の、千葉道場まで行ってます。行って、そこで試合やって、勝ったか負けたか知らないんですけど帰ってくる。そういう非常に面白い人物の息子です。子どもが畳の上で死ぬものではないと言ってね、っていうんで。だから、自分の、ちょっと作った子どもは畳の上で死

ないはずだからって言って、宮崎家を継ぐ人間を別に養子でもらうんですね。タカギゲンエモンなんていうのをもらってですね。ところがこれがですね、禁門の変のときに自分で死んでしまうんですね。だから、全然残らないんですけどね。非常に面白い家ですよ。これが大体は熊本の民権運動の出発点に当たる人物ですね。もちろん、ほかにもいます。いますが、大体、大きな位置づけはそうで。もう1人は土佐の板垣なんかと接触していたものがね、戻ってきています。それでも一緒になって植木学校っていうのを作って、言わば、熊本の民権運動の出発点になるんですね。この民権運動はね、日本中の民権運動の中のもっともラディカルな派閥を形成するの。日本ではですね、拠点と言えるものが3つあるんですね。何といてもその拠点は高知、土佐です。もう1つは福島というね、福島事件が起きますが、あの福島です。河野広中というですね、大変な豪農から生まれた民権家がいますね、これが大きな役割を果たす。だから、福島、会津、このあたりが中心。もう1つが熊本です。熊本は九州で一番早く民権派が生まれて、そして、その植木学校から熊本県下にずーっと遊説に行きます。遊説に行くと、あちこち行って、何や、子どもに話ししてるのと一緒やと言って帰ってくる。そういうんですけども、それが次第、次第にあちこちに根付きます。それが福岡に根付き、それから佐賀に根付きっていうね、という。鹿児島の方には、そうなかなか行かないんですけど。ともかく、あちこちに根付いていくんですね。その出発になるのが熊本です。ただし、これが西南戦争が始まりますと、協同隊という党派を、隊を作って西郷に参戦します。そして、もっともっと大量に参戦したのは学校党という人たちですね。一方ですね、実学党どうしてたかって言うと。実学党は明治3~6年の間に権力を握ります。熊本の「実学党政権」と普通呼んでる権力握るんですね。ここで画期的な行政を行います。最大のものは何と言ったって雑税の廃止です。大体ですね、30万石ぐらいが年貢および、それに雑税をずっと取られてるんですね。それが22万石ぐらいに。あっ、もっと減りますね。8万7000石減りますから。21万3000石ぐらいになりますから相当な減税、大減税になります。この大減税がね、あちこちに影響を及ぼすんですけどね。政策立案者の報告だから相当割り引いて考えなきゃならないんだけど、今まで土蔵がなかったところに土蔵ができたとか、瓦屋根がなかったところが瓦屋根になったとかね、という報告が、いろんな報告がありますけれども。あのね、阿蘇の北隣が日田ですね。日田のところに、つながってるところに豆田村っていうところがあって。その豆田村で明治3年の終わりに。つまり、隣の肥後では大減税が起きたそうなの話になって、そして、われわれも減税してくれないかという、そのために豆田村にわーっと農民が集まるんですね。その集まった農民を日田はですね。これはもともと天領でしたから。天領で、つまり、政府の直轄市になってる。前は奉行がいたんですね。いや、代官がいたんです。奉行でない。代官がいた。ところが新政府の役人がもう入ってる。それが農民が豆田村の寺に集まったもんですから、それを抑えに行く。そこから出発して一揆になります。だーっと谷を下って、日田まで行きます。日田で2万人の大群衆になります。これが「日田一揆」というやつです。日田一揆を肥後藩の。肥後藩はですね、軍隊を出して抑えろという指示、政府から言われて、肥後もですね、軍隊を日田に派遣します。そしたら、日田の民衆は肥後の軍隊を、兵隊たちを歓呼の声で迎えたわけです。つまり、ここにお風呂があるっていう「肥後尊隊御湯」とかね。看板掲げたりして。肥後の皆さーんって言うて迎えたんですね。何でかって言ったら解放軍みたいなもんです。そんなことがね、起きるような話だったのね。これは面白い、面白い。で、これもね、僕、何度も資料調査に行きましたけど、面白いんです。あのころま。余計なこともいっぱい今日言いますが。ちょうど近世で穴井六郎右衛門って言ってね、日田の一揆の指導者がいるんですよ。これ、かつてのね、一揆の志望者っていうのは、村の、大体、庄屋クラスなんですね。それは直訴するんですね。直訴をすると。直訴っていうのはね、どんなするかっていうと。竹、竹のね、竹、竹の棒があるでしょ？ あの枝を全部払うでしょ？ 枝を払って。そして払って、そ

の竹の一番上を2つに割って、この割ったところに、書状を書いて、挟むんです。これ竹の笹付けて言うんです。こうしてここに挟むの。挟んで。これを体の後ろに隠しておいて、そして向こうから駕籠が来たときに、駕籠のところまで、だーっと一気に走って渡すっていう。駕籠訴って言うんですわ。これが家老クラスに渡すんです。そうすると、途中で大体捕まるんです。捕まったらおしまいですね。そのとき、でも、捕まっても、そのときに竹の棒をそこまで出すんです。そして駕籠の近くまでそれが行ったら、駕籠の住人は必ずそれを取るんです。そして、大体、訴状の訴えは聞かれるんですよ。その代わり、そいつ。やった人間はクビです。獄門になります。これがまあ、システムですよ。そうやって死んだのが、穴井六郎右衛門ってのがいるんですわ。ほんで、ところがその子もね、その穴井家っていうのは庄屋をやってまして。六郎右衛門は殺されたんですけど。処刑されたんですけど。2万人の群集がね、豆田村からずーっと行くと増えていくんですけど。九重の方からもやって来るっていうんで増えてくる。増えてくるんだけど、その来る度に打ち壊しをして行くわけ、そこまで。打ち壊しの相手になるのが、その庄屋クラスの家だったわけだから。穴井六郎右衛門でも、これも庄屋だ！って言って、群集が飛び込もうとしたときに、やっぱり止めるやつがいるんです。この穴井っていう人物は一体どういう人物か？って。大演説するんですわ。もう本当これ映画みたいなもんですね。そして、そこを。そうかって言って、分かったって言って、そこを通り過ぎて日田まで行くというね。こういう面白い話がいっぱいあるんです。この日田の一揆はね、まだまだ研究の余地があってね、面白いんですけど、だいぶん、僕なんかも資料持ってますけど。肥後藩のことを考えるうえでも大事でね。実はね、それが皮切りでね、肥後藩を取り囲むようにして、あちこちずーっと一揆が起きるの。これが明治6年の、大体半ばぐらいまで、その一揆がね、断続的に続くんです。それがどの一揆もすべからくどう書いてるかって言うと、一揆の要求の中に「肥後並みの減税を」というのがあるんです。つまり、肥後の改革が、言わば何て言うか、周辺の一揆を誘発したの。僕は「隣藩一揆」って言ってますけど。誘発したのね。それが命取りになる。実学党政権にとって命取りになって、結局は潰されてしまうんですわ。潰されるより先に、大体、殿さんの連中がやる気なくしてね、肥後の守久なんていうのは、もう嫌やて、早くからも新政府に明け渡したいって言うし、護美は留学したい、留学したいって言うしって言うんで、もう、殿さんは、ずっと逃げ腰になってるんですけど、結局はね、最終的には高知からね、富岡っていう県令がやってきて潰れるんです。これがあれなんですけども、そういう、つまり、極めて顕著な動きをこの時期やるわけね。非常に劇的なんです。この明治の、この当時の熊本っていうのは。そういうものをそれぞれ受け継ぎながら、それぞれの人間形成をそれでやっていくわけですね。

民権運動はですね、西南戦争のときに協同隊でやって。そして、協同隊の連中は宮崎八郎はじめ、たくさん死にます。たくさん死ぬんだけど、途中で、山鹿っていうところではね、山鹿では自治政を敷いてるんですわ。これはね、選挙までやって、ちゃんと人民代表ってやつを選んで、協同隊が辞令を出して、そしてっていうのをやってるんですけど。今ね、山鹿の市立博物館で西南戦争の展示会やってます。すぐに見に行きましたけど、せっかくの山鹿の自治政なんちゅうのが、もう本当にいい加減にして書いてなくて、ちょっと残念なんですわ。日本の近代でまったく初めての試みなんですわね。そういう意味から言うと、あの自治政ってのはもう少し山鹿の特色としてもっと打ち出していいものだと思うんですけど、ちょっとあの展示は少しお粗末でしたわ。まあともかく。その生き残った連中が「相愛社」という民権結社をつくるんですわ。相愛社。この相愛社が憲法草案を2つ作っていますが。っていうのは、矢野駿男っていうのが作って、そいつを修正して、相愛社の憲法草案っていうのを作るんですけど。一院制の議会で。だから二院制じゃありません。普通の憲法草案と比べたらラディカルです。全文が残ってないんですわね。全文っていうのはすべての条文が残ってない。『東肥新報』という新聞にね、掲載し

たんですけど『東肥新報』が全部揃わないんですね。だから、すべての条文が見つからないのは残念なんだけども。しかし、残ってるものを見る限りにおいてもですね、極めて民主的な憲法草案を作ってるんですね。これがその一方で、もう1つ民権派として登場してくるのが、その実学派がですね、政権が潰れた後ですね、在野になって民権運動をやるんです。これが穏健な民権運動なんですね。大体、豪農層という昔の総庄屋ですね。だとか、それにつながるような人たちを基礎にした民権運動で、新聞は『熊本新聞』ていうのを出してました。だから『熊本新聞』ていうのによって、彼らは言論活動をやっておるね。だから民権派、相愛社の方は『東肥新報』ていうやつをですね。新聞を出すわけです。だからもう、連中はもう新聞合戦なわけですね。これはね、日本のね、大きな特徴なんですよ。しかも、熊本は最も早く新聞ができてるところです。だから『熊本新聞』の前に『白川新聞』ていうのがあるんですね。熊本県はね、まだ熊本県って言わなかったの。「白川県」って言ったの。「八代県」ていうのがあってね、八代県を入れて、もう1回白川県になって、白川県が熊本県に明治9年に変わる。名前が変わる。以後、ずっとこのままですね。ですから、白川県のときには『白川新聞』があつて、で、『熊本新聞』になってていうね。この『熊本新聞』が実学派の人たちが担ってたんですね。学校党の、つまり、熊本の中の主流派の人たちですね。主流派の人たち、しかも数がものすごい多い。例の西南戦争でもですね、大量に参戦をしたのが熊本隊。学校党の人たちですね。この彼らはたくさん死にます。死ぬんだけど、残った者の中の中心が佐々友房ですね。隊長は池辺吉十郎という。息子は池辺三山ってなって朝日の指揮者になりますね、ですが。この池辺が亡くなって、佐々は病気で宮崎監獄にいて、咳きつきって言ってまだ刑期が終わってないんだけど出てくるんですね。そして、出てきてすぐにやったのが何かつていうと、高田原の相撲町ってところに「同心学舎」ていうのを作ったんですね。で、学校の建設を開始するんですよ。それで、そうすると、彼の下に、旧学校党の人たちがわーっと寄ってくるといおう。だからもうまさにですね、その学校党の人たちと、同心学舎に集まった人たちと、民権派の相愛社と、実学派の相親社というですね。ただ、あんまり相親社ていう言葉は。実学はあるんですけど、使っていないんですね。あぁ、ここにも書いてませんが。書いてるかな？ 書いてないね。愛親しむ会、愛親しむ社ていうのが彼らが作ってるやつですけど、です。ここでもまた3つ鼎立してるんですね。うん。それがやがて実学。あつ、ごめんなさい。自由民権派は実学党と、それから勤王党から生まれたものが一緒くたになって、九州改進黨という具合になってきます。同心学舎に集まった人たちは「紫溟会」という大きい組織をつくり始めます。紫溟会が今度は母体になって、明治の15年に「済々黌」をつくります、ですね。で、この済々黌というのは紫溟会が設立母体。つまり、佐々友房がその出身になるように、紫溟会ていうのが。「紫溟」ていうのはこれは有明海のことね。紫溟の「溟」というのは「暗い」という意味です。紫で暗い海だったんですかね。うん。それを大体普通、紫溟は有明海のことですよ。そういう。熊本でいろんな人の、自分の号を付けるときに有明海の方を付けるか、それから三山の方を付けるか、阿蘇を付けるかって大体この3つぐらいですね。うん。そのうちの1つ。紫溟会つて。この紫溟会が中心として作っていくその後の、言わば、熊本の思想的傾向、これが民権派をも圧倒し始めるんですね。これがいつかって明治の10年代の終わりにはですね、県議会はですね、明治の18年までは民権派が優勢だったんです。ところが、その選挙で、18年の選挙で、がら一つと変わります。そして各種委員会の長。ここでも国会で予算委員会、何とか委員会つてのがありますね。そういうのと同じように常置委員というのがあるんですね。常置委員というのをですね、もうほとんど紫溟会が握ってしまうんです。で、紫溟会が握ってしまって、そこからが県政と、それからイデオロギーも含めて、紫溟会の指導下に置かれてくるという形になるんですけどね。その中心になるのが何かつて言うと、やっぱり済々黌なんです。済々黌。「県立」の「中学校」ていうのは。かつて、さっき植木学校つて言

いましたが、これ、県立の、これ、植木中学校って言って、これは県立の高校です。これは民権派運動をやるものですから、あんまりこう。要するに、結社みたいな動きがあるもんだから潰しちゃうのね。短命ではある。その後「熊本中学」っていうのができるんです。熊本中学ができるんですけども、これ県がね、予算ゼロにしてしまうの。予算ゼロっていうことは廃校っていうことよね。だから明治の18年、あっ、19年にはですね、もう、熊本には県立の中学は1つもなくなるの。1つもなくなった県立中学の中から、今度は済々黌を県立中学にしようという話になるわけですね。だから私立の県立中学校から来る。今度は女子部が尚綱ですね。女子部が尚綱だったんですけど、女子部を県立にっていう動きは全然なかった。だから、尚綱はそのまま私立の女子高として、その後もずっと続いていくわけですね。だから、県立の場合は済々黌が県立になる。そして唯一の県立高校ですから、そこに熊本県下から子どもが入学してくる。と、溢れる。溢れるとどうするかっていうと分校を造る。そのうち最初に造ったのが鹿本です。だから鹿本は黄線二本で言って、黄色い線が2本ということになったわけね。そして、そういう形で八高、八代だとか、天高だとかという、人吉もね、人高。人高ってもう。このごろ言えるようになったけど。そういうなのを造っていくというですね、ともかく、済々黌の教育方針のをですね、やる。済々黌っていうのは。これ2月11日でこれにかかるよね？ 紀元節の日にできるわけさ。これももう、極めて明快な建学の方針でね。国体を保持するということですね、これが最大のあれになっていて、精神になっていて。で、だからここが、この教育が、言わば、中等教育、熊本県下の中等教育を支配すると。ということになるわけ。で、みんなね、手元にこんなものがあるでしょ？ このグラフ。これはね、1979年にNHKの全国意識調査ってものすごい細かい調査でね、これはすごい調査です。だから、金がかかるもんだから、その後もうやってないんですけどね。この79年の意識調査が各県で大体サンプルは3,000ぐらいですね。すごいサンプル取ってるの。

これね、政治的保守主義っていうものと、伝統的価値意識っていうものを縦と横軸にして各県の特質を示したものです。これ、伝統的価値意識っていうのはね、1つは皇室を尊崇するとかね、皇室の尊崇、これが一番肝心です。それから伝統的な行事を重視するとか。それから、祖先が大事だとか、というね。そういう。そういう、一連のものをこの質問項目の中から、データとして集合しました。政治的保守主義は、もう自民党支持率だけで判断しました。当時はまだ良かった。今はこれ難しい。今の政治が非常に難しいですね。これをこう見るとですね、そしたらね、やっぱり相関関係あるんですね。こういう具合に。これは数字を計算して、ここに棒を引いたんですけど。棒を引くと、一応、A、B、C、Dという具合に時計回りに1つグループが出来上がる。そうするとですね、あの当時。実はものすごい面白いと思ったのはね、このね、ほら、Bのところ、のところに新潟ってあるでしょ？ Bのね、下の方にあるんです、これ。この新潟っていうのがいかに伝統的意識が低いかっていうのが、これ見える。全体として非常に低い方に。そうするとですね、こういう低いところは、この放っておくっていうか、この、この棒にですね、この平均値に限りなく近くなる可能性を。引っ張られるわけですね。引っ張られる。だから、引っ張られないために、それ右寄りにするためにはですね、実はこの、そいつを右寄りにするための努力が必要なんですよ。これは。でね、これで理解できたの。田中角栄がね。田中角栄がなぜかという話。だから、やっぱり彼は、あそこ地元でね、利益を誘導するために、もういろんなことやったわけですね。それだけの努力をしないと、実は、恐らくね、こういかないんだろうと思います。これがね、1つの何て言うか、面白いですね。だからこの新潟の位置はね、京都、大阪とあんまり変わらないです。伝統的価値意識は。そするとね、大阪、京都っていうのは大体この線の上にあるんですよ。非常に安定してるわけです。安定して、安定して、これは革新的なんです。それなりに。でね、まあしかし、もっと面白いのはですね、1つは沖縄ね。沖縄。ここはやっぱり別格なんです。別格。伝統的価値意

識っていうよりも低い。政治的な保守主義も低い。これと対照的なのが熊本とこうなるわけです。うん。で、熊本はですね、これ。これ本当にね、群を抜いてるんですね、どっちとも。ということはね、これは例えば、自民党の政治家が、地域のためにどれだけ貢献するかなんてことを何も考えなくても自民党に票が入るといって、いう。そういう傾向を示してるわけですね。これはですね、79年当時、つまり、第一次オイルショックがあつて、そのあとすぐに立ち直つてというですね、そういう時期で、まだバブルにならない時期ですね。ですから、そういう意味から言ったら、この時期の1つの大きな特質を表してますね。全体に熊本でしょ？ 山口、宮崎、佐賀ね？ というのが大体こういうところある。確かですね。だから、九州の割合多いですよ。九州が多い。福井もね、割合高いんですけどね。福井。福井、ほら、線の上にありますけど、ほとんど。ですけども、こういうところにあつて、割合、伝統的価値意識も政治的保守意識も高いつていうことですけど。こういうのが見て面白いなあという。ただ、これの票が、こういう形でできるまで相当時間かかったんですけど。うん。やってみると面白いというね。この問題はですね、なぜこういう形になるのかという問題なんですね。それは僕は、さっき言った中等教育の、済々黌による中等教育の支配つてやつが、やっぱり伝統的なそういう価値意識をつくる上ではね、非常に大きかったのではないかっていう具合に思つとるんですよ。うん。

そこでですね、実は。ところが、そういう済々黌の中から実は異端も生まれるんです。異端も生まれる。その済々黌の中から異端が生まれたという意味で、代表的なのがやっぱり、初期社会主義的運動で熊本評論の人たちなんですね。熊本評論の人たち。そこで熊本評論に入る前にですね、実は、言わば、自由民権期の運動から、時期からですね、この初期社会主義の方に行くのにですね、大体、ルートが2つあるんです。1つは何かって言うとキリスト教。クリスチャンです。このクリスチャンも熊本は明治9年に熊本バンドつていうのを作ってるわけですよ。だから、熊本バンドつて独自のキリスト教の組織つていうか、そういう集団が生まれていて、これが同志社とつながる。組合協会ですね。そして1つの路線を作っていくんだけど、僕は今度のそごうのねシンポジウムのときに少し言いましたけども、信仰告白というよりはむしろ進歩の精神としてキリスト教を受け取つてつていう傾向が強いですね。これは双方なんかはもう見事にそうですけども、全体にそういう傾向も強くて、だからむしろ初期社会意識の進んでいくクリスチャンはですね、明治20年代にクリスチャンになった人の方が多いんです。明治20年代つていうのはですね、23年に教育勅語ができるでしょ？ 教育勅語ができて、そのね、キリスト教に対する軋轢がわーっと高まるんですよ。これは内村鑑三がね、最初に一高で、教育勅語の奉読式のところに敬礼をしなかったと。敬礼つていうのは、会釈は敬礼のうちに入つてないんで。何とかここをきつと曲げないかんのですよね。こんなじゃやっぱり駄目なんですね。それが批判を受けて、彼は一高を追われることになりましたが。これが最初で。その次に「神道ハ祭天ノ古俗」という論文を書いた。誰だ？ 誰だ？ 名前が出てこない。まあいいや。いや、新党ね、新党。新党、祭典、祭りの古俗つていう古い習俗。えーつと、えつと、えつと、えつと、あれですわ。その弟は絵描きで。えーつと。うーんと。岩倉使節団の記録をした人。知らん？ えー、おまえは知らんなあ。えーつと、えーつと。まあ後で出てくるでしょう。こんなもん名前が出てこないのがおかしいんだもん。そういうのがあるんですよ。で、そういう批判があつた後ね、あのね、熊本で3つの立て続けに事件が起きるの。これも熊本は全国に先駆けての事件です。「熊本英学校事件」つていうのと、それから「八代南部高等小学校事件」つていうのと、それから「山鹿高等小学校事件」つていうのと3つ事件が起きるんですよ。最初の英学校事件つていうのはね、英学校はクリスチャンの海老名弾正がやつた。ここに新しい校長を迎えるときに、迎える先生が、キリスト教の精神はかくあるものだ！ つて言つて大演説した。その中にわれわれの眼中には国家ない。国家なし。世界を見れるんだという。国家のようなそういう小さなセクションでものを

考えてないんだって言ったんですね。これが批判を受けます。眼中無国家事件って言うんですね、事件になって、叩かれる、叩かれるっていうんですね。この事件があって。これが日本中に喧伝されます。これが1つ。次は、八代南部高等小学校事件っていうのは、6月の梅雨時に、小学校に、ちょうど休みの時間に、窓を開けてる、雨が降っているっていうんでツバメがね、雨を避けて、教場って言いますけども要は教室ですね。教室はこれぐらいの教室ですと、真ん中までぐらいに机があって、黒板があって、先生の教壇がある。もうこれが開いてるんですわ。こっち両側に窓がある。そのうちのあそこ、上の角に棚が置いてあって、そこに天皇の写真、真影、御真影があって、それを回りをカーテンで仕切ってる。風が吹いてて、ぺらぺら、ぺらぺらなってる。そこにツバメが飛んで帰ってきた。ミノダゲンタクって男の子が腰に挿している扇子をハッて投げた。そしたら簡単にツバメに当たらない。写真に当たって、御真影に当たって、御真影が下に落ちた。ただそれだけの事件なんですけど、それをチクするやつがいる。そのミノダっていうのがクリスチャンだったっていうんで、クリスチャンはそういう御真影に対する、そういう不遜なことをするっていうんで大宣伝を行う。これが高等小学校ですよ。子どもが扇子持ってるんですから大したもんですけどね。そしてね、次が山鹿高等小学校ですよ。これはね、小学校のね、休み時間にね、休み時間で、あっ、体操の時間にですよ。に、子どもたちが校庭に出てる。その出てる間に先生が子どもの持ち物調べをやる。かばんの中ば一っと調べていらっしゃる。僕の小さいときにもあったと思うんですね、そんなのが。そういう、そしたらですが。バイブル、バイブルの研究会の案内があったんですね。バイブルの研究会。3人から出てきた。それを1人ずつ校長室に呼んで、やめろ！って言うわけ。親もクリスチャンなんです。で、やめないって言うんですね。これがまた大きな事件になって、熊本で3つ立て続けに大きな事件が起きて、キリスト教は受難の時期を迎えるんですね。その受難の時期に受洗した人たちがいるわけですね。これが松岡荒村というあそこの何だ？ 高田、八代の高田っていうところの出身で。松岡家というのはね、懐良親王のお墓を守ってる家なので。なんですけれども、その松岡というね、松岡荒村。もとの名前は何でしたかね？ 「荒れる」「村」って書くんですけど。彼は三年坂教会で受洗します。三年坂っていうのは鶴屋の裏のね、あそこにあったんですけど、移動して、今は白川教会ってなって、あれがもとの三年坂教会。あそこに受洗者の名簿が残ってるんですよ。ここで受洗をした彼が同志社に行って、同志社でそういう社会的な問題やなんかいろいろと接触するんですね。それで結局は、例の足尾鉍毒事件の現場まで見に行きます。うん。そしてこれが初期社会主義者になるんですけど、徴兵令が来て、第六師団に入営する直前に死にます。詩はたくさん書いてましてね、これはね、感動的な詩を書いてます。松岡荒村。もう1人同じ25年にね、三年坂教会で受洗したのであれがいます。田添鉄二っていうのがいます。これは天明の人。これはもっと知られていい人です。あまりご存知ないでしょ？ 田添鉄二って。あのね、幸徳秋水はご存知よね？ 幸徳秋水と同じときに、幸徳秋水とまったく意見が違う社会主義者だった人。幸徳秋水っていうのは、つまり、ゼネストっていうね、日本全体でストやるっていうそれぐらい、そういうことでもって世の中を変えるというっていうんだけど、田添鉄二は議会の中で議論を尽くして、世の中を変えるべきだっていうことを堂々と主張した人です。熊本出身ですからね。たくさん、そういう論文も、っていうか、主張も書いてるんですけども、意外と知られていない。ですけれども、熊本はそういう人たちを生んでるんですね。それもやっぱりですね、逆に、キリスト教がそういう非判っていうか、攻撃される中であえて受洗してるという非常にそういった意味で気骨のある部分ですね。これがキリスト教からで、それは全国的にはたくさんあって、木下尚江だとか、ここに彼の本の、文献で、これは『新紀元』だとか『光』だとかキリスト教社会史の雑誌、あの、新聞です。こんなのは。これは主に一生懸命に彼らは新聞を出して、あれをしてたわけですね。これがその写真。もう1つは民権運動からの直接の系譜ですね。この

民権運動からの直接の系譜というのは誰かっていうと、一番典型的なのは幸徳秋水になるんです。これ中江兆民の弟子です。ですからまあ、そういう。宮崎八郎から宮崎民蔵へ、宮崎滔天へっていうのもこの線の中に入る。ただね、民蔵も滔天も、それから矢蔵がその次にいますね。滔天の前に。民蔵と矢蔵と滔天と。だから、男ばかり4人いるんですが、養子入れたら5人いるんですね。男が。ですが、社会主義者とはちょっと言えないんですね。民蔵は土地復権同志会って言うんですね、土地っていうのは天からの授かり物だから、それをシユすべからずっていうのが彼の議論。うん。天賦人權とよく似た議論のしかたをするんですけどね。こういうのが民蔵の議論ですけど、それも1つの流れです。

そういう流れとは全然っていうか、ほとんどかかわりなく初期社会主義者者とわれわれが言う人たちになったのは済々黷の中から生まれた同世代の松尾卯一太と新見卯一郎なんですよ。だから、この松尾卯一太っていうのはですね、玉名の川島っていうところです。の、中地主から。中地主ですね。中地主で、今もこの松尾家の分家の1つは。分家っていうか、もともとの出ですけども広瀬という家がありまして、これは大きな地主でありまして、戦後、農地改革でだいぶ減りましたが、やってた家が残っています。屋敷地は広い屋敷地でね。その向かい側に松尾の家があったんですけど。彼は、家は、地主であると同時にいろんな新しい試みをたくさん。養鶏をやってみたりとか、いろんなことやりますが。彼は高校時代、その当時は済々黷時代に社会のさまざまな矛盾を自覚して、そして早稲田に行き、そしてシャケン、後のシャケンと言われるものの最も走りのものを作って。で、戻ってきて、そして言論活動をやるんですね。これが『熊本評論』という。新見卯一郎っていうのはですね、大江のですね、大江の井出のですね、そばで水車をやっていた家です。水車をやっていて、要するに本人の家もそれなりの地主で米をたくさんあって、米も、水車もやるという家で。墓はあそこに。立田山の墓地に墓がある。もともとは河川敷にあったのを移動したんですね。六・二六で流れたために移動したんですけど。まあ、そういうふうに。この2人が中心となって言論活動やるんですね。ここに入ってきたのが坊さんの息子の佐々木道元。これ坪井です、の人。そしてもうこれが弾圧を受けて、新聞が発刊できなくなって、最後のときに飛松与次郎が加わってきます。これ山鹿の人です。この人。ほかにたくさん『熊本評論』にはかかわる人たちがいます。女性で言えば黒瀬珂瀾であったり、一木燐水（一木斉太郎）という、これは民権運動からかかわってた男ですけども。であるとか、いろんな人たちがこの運動の中に参加するんですが、1910（明治43）年に一網打尽に逮捕されます。熊本も捕まった人間はたくさんいるんですけども、最終的には4人が残って、4人に死刑判決が負います。松尾、新見、佐々木、飛松っていうのがね。4人。全国で24人の死刑判決を受けた者が出てくるんですね。これを天皇の恩赦っていうことで、半分にして、12と12に分けて片方を無期にしたわけですね。熊本も2グループに分けて、松尾、新見が死刑で、あと2人が無期ということになる。翌年1月の24日に処刑されます。菅野すがっていう女性がいましたよね。菅野スガだけは女性だっていうことで翌日に処刑が行われます。ですから、24、25と。このときに、この問題を徳富蘆花は取り上げたわけですよ。一高で、彼は朝日新聞に彼の直訴文章を出す。投稿します。一方、奥さんの愛子さんとは水杯を交わして、一高に行って、一高で講演します。一高で「謀反論」というのを講演するんですね。これもまあ大変な決意で。恐らく。これ、おととも話してたんだけど、蘆花が手回して処罰を免れたかっていう話もしてましたけども。恐らくそういうことはあったらと思うんですね。それがなかったら恐らく処罰されていた可能性の方が強いんですね。天皇への直訴ですから。直訴ですから、天皇に対する敬意は払ってるわけですよ。これはだから、幸徳秋水なんかと同じレベルではいけないんだけど、少なくとももしかしそう。しかし、蘆花はね、その後、トルストイに会うし、ロシアの社会主義者者、ロシアのどっちかっていうとムセンフシに近い者との接触があるんですけど、どちらにしてもですね、ここで、彼なんかで言うと、徳富流ともうまったく

違った路線を兄弟は歩むんですね。まったく違った路線を歩む。片方はもう国家主義の、言わば、宣伝っていうか、のための活動。つまり、報国、国に報いるという。言論でもって国に報いるってというのが彼の方針でしたから、そういう方向に進んでいくんですね。だからまあ、そういう意味ではこの明治の末というのはですね、非常に面白い動きをするんですね。これが一方の動きなんですね。

3. 保守本流の形成

もう一方。もう一方はどうかっていうとですね、済々黷本体の方ですね。というのは、済々黷本体の方って、本当、済々黷と言っているかどうかはともかく済々黷を造り上げた佐々たちはどうかっていうとですね、これが熊本のレベルで終わってるんでなくて、これも日本の保守本流を作るんです。これが僕はやっぱり、ちゃんと理解しとかないといかん大事な点だと思ってるんですね。で、さっき、つまり、熊本の中等教育を済々黷が握ったということがあって言っていました。しかし、その路線がね、日本の保守本流とつながってるから強いんですよ。ここが大事な点なんですね。実はね、僕は、佐々ってというのはもうずいぶん興味があつて。いずれ、佐々ってというのはちゃんと文章を書きたいと思ってるんですけど。何が面白いってね、実はね、佐々たちの行動の指針みたいなものはもう佐々自身の固有の能力もありますけど、一方でね、井上毅が新政府の太政官の書記官として出ています。太政官の書記官で、これは岩倉具視のほとんどゴーストライターです。岩倉具視の明治の10年代までのものの多くはですね、実はこの彼が書いています。井上毅が。大変な能吏で。これは幕末にね、横井小楠と沼山、沼山津で対談して。沼山対話ってというのがあって。その沼山対話の後で小楠がね、彼は優れた男だっていうことを認めて、内心、残念なのが学校党のやつだからって言うんだよね。だからこれが自らの方のね、実学派の方だったらどんなに良かったかっていうぐらいに、評価をした男で頭の切れる男ですよ。彼は維新後、フランスに留学をします。フランスに留学して、フランスでドイツ法学を勉強するんです。これが彼の強み。うん。だから、近代的で民主的な法学思想というものも手に入れていて、それで国家法としてのドイツ法を、特にプロシアですね、学ぶんですね。これが憲法っていうのはですね、憲法の本質は何か？堂々と言うんです。憲法の本質とは権力を分化することこれなりって言うんです。権力を文化するてというのが憲法の精神なんだと。どういうもんかっていうと国家と社会に文化するんですよ。国家の領分と社会の領分ていうのをきちんと分ける。社会の領分に対して国家の領分は、それを侵害すべきではないっていうのがフランス法の基本です。それをもって日本の近代の、言わば国家というものをですね、法を考えると、すごい男がいるわけですね。これが太政官の書記官から太政官大書記官へと上り詰めていきます。で、岩倉は。岩倉は一方で民権運動をわんわん、わんわんと激しくなってくる。そして、それぞれの民権の結社ってというのが独立で動いていたのが愛国社っていうところでまとまり、しかもそれはより、何ていうか支持者を増やしながら、国会規制同盟っていう具合に発展をしていきます。そうして国会規制同盟は、全国の結社に向かって憲法草案を作って、それをみんなで検討しようと言います。それをわーっと全国の民権結社は憲法草案を作るんですね。それが熊本でも憲法草案になって現れるんですよ。ですから、あっちこっちで憲法草案作られるんです。今、全体で民権派の憲法草案は全部で40ぐらいですけど、民権派と言えないものを含めると、全部で60~70の憲法草案があると思いますが。ともかく、たくさん憲法草案があつて。この憲法草案を総合しながら、岩倉は井上毅にね、日本の国体に見合った憲法っていうのは何か？っていうのを検討しろって言うんです。国体に見合った憲法っていうのを。これが井上に与えられた大きなテーマなんですね。彼は苦心惨憺、民権派も勉強するわ、それからプロイセンの憲法や、それからロエスレルというですね、プロシアから来た法律顧問、この彼らとも散々議論した挙句に、この明治14年の7月に「大綱領」という、綱領に大が付いてるんですけど、大

綱領という基本方針を作るんです。大綱領という基本方針が、これが大日本帝国国憲法の骨子です。骨子。で、その井上毅のサゼスションを受けて、佐々たちは熊本で動くんですね。僕はね、これが最近のあれなんですけど。僕は井上毅の一貫した指導制の中にあったっていう具合に思ってたんですけど、ここ2年ぐらいの間にだいぶ変わったんですね。実はどういうことかという。佐々の。これ、あそこのときにちょっと言いました。蘇峰のときにも少し言いましたが。あのね、国会図書館の県政資料室って、僕がしょっちゅう行くところです。その県政資料室の中に『佐々友房関係文書』っていうのがあるんですね。この『佐々友房関係文書』っていう中に「憲法草案」という草案があるんです。名前も「憲法草案」というんですわ。佐々のやつを、文書を調べていると「憲法会」というのをどうも彼らが作ったのね。憲法会っていうのを作って「憲法草案」という憲法草案を作ったんです。実はこの憲法草案というのは非常に面白い。面白いのはですね、何が面白いかっていう。これは本当にタッチの差で僕が見つかるのが遅かった。稲田正次っていう憲法学者が見つけたんですよ。でね、この彼はそれを見て、それを分析して、これは佐々のところに何であるんやろ？と。しかし、これは民権派の憲法草案を彼が、何らかの理由で佐々の手元に行ったんだという具合に考えたのね。何でそう考えたかっていうと、つまり国民は国家の暴力に対して身を守るために武器を携える、武器携帯の自由を持つという文章があるんですよ。武器携帯の自由っていうのがね。これアメリカ流の。今のアメリカの銃社会っていうのはここから来てるわけ。国家が暴力。だから、私的なそういう関係の中での銃じゃないんですよ、あれは。国家の暴力に対して抵抗するための本来はある銃器なんですよね。本来は。ところが銃社会になったらろくでもないものにしか使わない。殺人に使うってなっただけ。そういうものがあるのね。これは。これはもう民権派だって、稲田正次さんは言ったんだけど、何を言うてるかい？と。これは全然違うんです。何でかって言ったら、西南戦争をやった経験を持ってる人たちなんだ、作ってるのは。西南戦争っていうのはね、最大の理由は何かって言うと、クウソクノカンヲを除くっていうことなんです。つまり、天皇のそばにいて、天皇の権威を利用して、実は権力を欲しいままにしている者を倒すというのが戦争の大義名分なんです。少なくとも熊本の彼らは。薩摩の人たちはちょっと違うんです。薩摩の人たちのあれをやるのはですね、刺客を、警視庁が、東京警視庁が刺客を送り込んできた。それで西郷を殺そうとした。これに対する、何でこんなことするんやっていうのを国家に尋ねるための挙兵であると。これがまとまった挙兵の理由なんです。熊本隊はですね、それを聞いて、西郷が刺客に襲われるという、あるいはそういう計画があるっていうことをもって、われわれが立つ理由になるか？って論争をするんですよ。それはならないだろうと。われわれが何で西郷がやられそうになるっていうことでもって兵を上げるか？って。違うと。われわれは上げるのは、クウソクノカンを除くためであると、というね、そういう結論を出して、出して、出発するんですよ。佐々たちも。それから民権派も。目的は一緒なんです。その目的で倒して、クウソクノカンを除いた後にどういう国家を作るかっていうところに意見が違うわけ。とりあえずはあそこ除かないかん。除くには西郷っていうのは、の下で動くのが一番効果的であるし、いいという判断をするわけね。これが判断の最大の名文のところですよ。うん。そうするとね、佐々たちもその経験があるわけ。これは彼らのやった行動の正当性ってやつは、やっぱり憲法の中にもちゃんと生かされないといけないと彼らは思ったわけだ。それが憲法草案になって出てくるわけですね。だから、これはそこらへんをチラッと見ただけでは、民権派と区別がつかないと思う。これは僕はしかし、まったく間違っているんですね。最大に民権派と違う理由は何かっていうと、国体と政体っていうものを分離してるっていうことです。国体と政体っていうね。これはね、もう。今どきの憲法学者は全然分からないですね。うん。もう僕長いこと、この議論、今、国体と政体の議論をやってますが、なし崩し的に同調してくれる人たちは生まれてますけど、なかなかここはそうではないです

ね。理解してない人が圧倒的に多いっていうか。つまり、どういうことかって言うとね、これは言わば発明なんですよ、日本のっていうよりも井上毅の。国体と政体の分離っていうのは。つまり普通はね、普通は天皇が主権を持つでしょ？ 天皇が主権を持って権力を握ったら、そいつが問題起きたときには責任を負わなきゃならないという。これは通例なんですね。イギリスの憲法は、イギリスっていうのは、あれは文章になった憲法持ってませんけども、イギリスの場合には何かっていうと、政治的権能を実行しないわけよね。実行しないから責任も負わないんです。実行したら責任を負うという。だからね、ここが問題なんです。イギリスっていうと、というのはつまり、彼らは儀式として、儀式を行う存在としてはそこにいても、政治的権能はないわけですよ。これは首相が持つてるわけ。ですから、君臨すれども統治せずという有名な言葉ですね。ところが、これは君臨していて、責任を負わないという構造をどうやったら作れるかっていうのが、ここの最大の問題なんです。君臨していて。だから三島の長。つまり、立法も、行政も、司法も、すべての長であって、そして統帥権も持ち、貨幣を造るチュウカ権も持ち、それから戦争の、戦線布告の権、戦争をやめる権利、統帥権ですね、これにつながってるんですけど、これ、でも、条約締結、締廃の権、恩賞、こういったものすべて、その大権と言いますね、だから、その天皇大権というものを持っている。普通だったら、この天皇大権を持っているんだから、責任を負わなきゃ駄目だろうというんだけど、にもかかわらず責任を負わないという。「無答責」という。「無」は普通「無い」という字、「答」は「答え」という字、「責任」。「責任に答うる無し」というんですけど。これはね、法律学者の言う言葉です。無答責っていうのは。歴史学者は何ていうかって。「無責任」って言うんです。やっぱりね、天皇ことについて言うのにね、「無責任」って、やっぱり言いにくいみたいですね。うん。だから無答責って言うんですね。同じこと言ってんですけどね。天皇の責任に答うる無しっていうんです。それとね、もう1つは天皇が天皇になる根拠は国会で承認してるんじゃないでしょ？ 国会の承認じゃないですもん。根拠は何かかって言うと、天皇家の歴史に根拠がある。歴史に。だから、天皇家の歴史っていうのは何か？ 万世一系ということです。万世一系。その万世の一番初っ端が神武、綏靖、安寧、懿徳、懿徳、孝安っていう、神武天皇ではなくて、その上の天照大神。天照大神から神武天皇に来て、神武天皇から綏靖、安寧、懿徳、懿徳、孝安っていつてずっと続いて、推古、舒明、皇極、孝徳、斉明、天智って、ずっとこう行くわけですね。そして、今の天皇に行くという。こういう、これは天皇家の歴史という。だから、国民が納得するとか了解するからなってるわけでもなしに。あるいは誰とかがそれを指名するわけでもないという。だから、万世一系とはそういうことです。だからこの3つ。万世一系と、天皇体系を持つてることと、責任を負わないというこの3つを持っているのは国体なんです。国体。これが保存できればね。これが保存できれば、政治はどんなに変わっても問題ありませんというのが、この基本なんです。政治って、政体です。だから例えば、選挙制度で言うと、最初はね、直接国税15円以上納める者が選挙権を持つと。国民のせいぜい3%なんですね。というこれが基本だった。それが10円になり、3円になり、それで最後は普通選挙制になった。1925年に。実際の選挙は28年、昭和3年に行われた。そういうことがあっても上は全然変わらない。それから議院内閣制って言って、つまり、もともとは議会の中である政党が多数派を握ってるとか、握ってないとかということでもって、首相が決まるというのとは無関係でした。「超然内閣」っていうんですね。ところが議院内閣制になるでしょ？ 議員内閣制になったところで国体は変わらない。つまり、こういう構造を実は、この井上毅が発明したんですわ。つまり、議会で法律が決まる。それは最終的には天皇のところで天皇の裁可を得る。天皇の裁可を得ても法律にならないんです。天皇の裁可を得てもう1回内閣を通過して、内閣の中で大臣がそれに副署、署名するんです。それで初めて成り立つんです。副署は何のためにするかっていうと、その副署した大臣が天皇に対して責任を負うという、この構造ですね。これが出来

上がったんです。そうすると国体と政体というのは、これで明快に分離すると。これが今度の憲法草案なんですね。ところがですね、僕は1つだけ誤ってたんですね。じゃ、實際上、内閣でさまざまな閣議をやるときに天皇はその場にいるのかいないのかという問題。これはいないことを前提にしてるんです。いない。ところがね、井上毅が作った憲法草案にはね、天皇が親臨、自らそれを望んでるという出席してるんです。そうするとね、そうすると、これは、実は、今の国体と政体の分離原則は崩れるんですわ。崩れる。ところが佐々たちが作ったやつには分かれてる、ちゃんと。つまり、佐々の方が先に言ってるんです。うん。これがね、つまり、井上毅の大きな大きなサゼスションで生まれながら、彼らはもっとそれをね、徹底して1つの国家構想にしてたんですね。その部分、つまり、井上よりも先に言ってる。言ってるんですよ。これが最近の僕の発見なんです。うん。だから、非常に面白いですね。彼らはそこまで到達した、言わば、何ていうか、国家に対する見通しみたいなものを持って、今度は熊本を出て、中央で動くんです。蘇峰が大江義塾っていうのを作って、そしてそこをベースにして東京へ出て行ったのと、『将来の日本』という原稿を抱えてですね、行ったのとちょっと似てるんですけども、佐々は出て行く。で、何をやったかって言うと、もう何てたって中心になったのは対外交運動。つまり、外国との交渉ですね。つまり、条約改正交渉が難航している。条約改正交渉が難航しているのを何とかせないかん。そのためにはいくつも方法があるけども、ともかく法律を逸脱して、外国人が日本国内を自由に旅行したり、土地を買ったりしているというこれを直さないかん。つまり、条約のままを履行させるべきだと。つまり、不平等条約なんだから。不平等条約ながらそれを実行せると、外国人は非常に不便に思うわけね。不便を感じると条約を開設せざるをえなくるといふ、そういう議論が生まれてくるであろうと。そういうわけで、条約履行というやつをですね、主張に掲げると。そして、内地雑件に対する反対をする。外国人が一緒にたに生活してることに反対をする、っていうね。これを、その中心になるんですよ。それでもって国民教会であるとか、大日本教会だとかっていうものを熊本の国権等がその核になって組織していくんです。これが憲政会というもになり、民政党になっていくんです。これがさっきのこの表でいきますと、これが、この立憲同志会から憲政会に行く。憲政会から民生党へという。これはもう熊本県の名前付いてますけれども、これはまさに憲政会と民政党を作っていく核になってる政党は何かって言ったら熊本国権党なんです。だから熊本の、言わば、国家構想を含めた保守的な、政治姿勢が言わば、保守の本流を形作っている。だから、かたっぽが名うての民権派ができ、ラディカルなものができるとすれば、片方は最もラディカルにその保守の本流を作っていくんだというね、これが熊本なんですね。僕が熊本に来て、これ見てて面白い、面白いんですよ、やっぱり。熊本を見てるとね、ほとんど日本国が分かるんです。うん。そういう面白さがあって、ずっとこだわりながら述べてるわけで。そうすると、回った後もね、理解できるだろうと。

おわりに

やがてもう、ほとんど1時間半近くなりますが。授業も大体こうやって終わると、ふと見ると1時間半ぐらいなんですよ。というわけで質問か何かやら、何か意見があったら。

終了